

FD 通信 No.10

飯田女子短期大学 FD 委員会

<http://www.iidawjc.ac.jp>

学生の学習成果獲得に向けて

FD 委員長 北林ちなみ

FD とは、「大学教員の教育能力を高めるための実践的方法」のことであり、大学の授業改革のための組織的な取り組み方法を指しています。以前は個々の教員の教育内容・授業方法の不断の改善が強調されていました。しかし、平成 20 年に FD が義務化となり、中央教育審議会の答申では、単に授業内容・方法の改善のための研究に限らず、広く教育の改善、さらには研究活動、社会貢献、管理運営にかかわる教員団の職能開発全般を指すものとされ、それまでの授業改善に特化していた FD に新たな解釈が示されました。これ以降各大学では、学修の主体者である学生が学習成果を獲得できるようにするために、FD の活動を考え取り組んできています。

本学の FD 活動では、授業改善アンケートや学内公開授業、講演会・研修会、FD 通信の発行、新任教職員の研修などを行っています。その活動を実施することが目的化するということがおこってくる可能性があります。それを実施することの目的を明確にして、実施して終了ではなく、次へつなげる活動を続けていくことが必要です。それが PDCA サイクルを回転させていくことにつながります。教員と職員が共同してカリキュラムや教員個々の授業についての配置や内容、方法、教材、評価等の適切性に関して学生の参画を得て検討を行い、それらの取組みの妥当性、有効性について継続的に検証を行い、また計画へつなげることが PDCA サイクルを回転させることになります。今後は大学全体として取り組む教職員の組織的な授業・教育改善が必要です。FD と SD が共同して活動することが重要になってきます。

個々の教員の授業が良いものになることも大切ですが、学生の短大での学び全体を捉えて大学教育全体を改善していくことを考えた FD でなくては、改善された個々の教員の教育力が活かされない、ひいては、学生の学習成果を十分に高めることも為し得ないことになると思います。全学または学科専攻全体で取り組んでいき、学生の学習成果の獲得ができるようにしていきましょう。

目 次

学生の学習成果獲得に向けて	FD 委員長 北林ちなみ	ページ 1
＜FD 講演会＞アクティブラーニングの基本と実施事例	FD 委員会研修担当 神澤絢子	
家政学科 竹村春香 / 幼児教育学科 堀田浩之 / 看護学科 下島浩		ページ 2～3
＜特集：キャリアデザインでの取り組み＞ 幼児教育学科 キャリアデザイン担当 田中住幸		ページ 4
＜キャンパスライフに対する学生満足度アンケート実施結果より＞ 教務課長 山口正之		ページ 5

＜FD 講演会＞ ～アクティブラーニングの基本と実施事例～

去る3月9日(金)に、教職員52名の参加のもと、平成29年度FD研修会が開催されました。今年度は「アクティブラーニングの基礎と実施事例」について、玉川大学教育学部教育学科の田畑忍先生をお招きし、30分の講義ののち、実際の授業に対する個々の振り返りを行いました。

講義では、実際に先生が行っている授業の方法と技術を紹介していただきました。ミニッツペーパーという振り返りシートを活用し、授業の振り返りを行ったり、アイスブレイクを行ってグループワークで協力できるように工夫したりといった、具体的な方法を提示してくださいました。

その後、自分たちがどのような授業を行っているのかを共有するために、用意していただいたシートに、指導方法、成果、方針、理念を書き込み、それぞれがどのようにつながっているのか、そのつながりを見ると自ずと改善策が出てくるといった方法で振り返りを行いました。振り返った内容をまず、ペアを組んだ相手と内容の共有をし、最終的に全体の共有を行う中で、自分の指導方法や方針に挙がらないものもあり、個々の授業への改善点が明確になりました。今回の研修では、アクティブラーニングは手段であり目的ではなく、「何のためにそのアクティブラーニングを取り入れるのか」「目的を実現する手段になっているのか」と考えることができ、それぞれが今後の授業の在り方を考える良い機会となりました。

(文責 神澤絢子)



「FD 研修会に参加して」

家政学科 竹村春香

今回の研修会では、伝わるように伝えるための多くの技や工夫を教えてくださいました。まとめシート作成のワークでは、授業について可視化をしたことで、日々授業を行っていく中では深く考えられていなかった学生への願いや、具体的な内容について整理ができ、多くの気づきがありました。振り返りはもちろんですが、このまとめシートの作成は授業を組み立てる手引きにもなると感じました。今年度私は初めて授業を行うという経験をさせていただきましたが、授業の組み立ては特に苦戦した部分だったので、早速来年度に向けてこのシートを活用したいと思います。アクティブラーニングについても今回多くの実践例を教えてくださいましたことで、まとめシートで見つけた改善点に繋がる具体的な方法を知ることができました。学生の「受動的な受講」ではなく「能動的な学修」に繋げていきたいです。

研修会での他の学科・専攻の先生方との共有から、普段なかなか知ることができない学生への思いや授業の進め方、気を付けている点などを教えてください、自分もこんなことを取り入れたらどうなるだろうかと考えの幅が広がりました。FDという組織的な取り組みだからこそ生まれる貴重な学びでした。

「言ったら伝わると思うのは教える側の傲慢」という講師の先生のお話がありましたが、今回の研修を通して学んだことや感じたことをこれからに繋げるのはもちろん、学生に伝える立場として、多くの学生に「伝わる」にはどうしたらよいか、日々考えながら生活を送っていきたいと思います。

「FD 研修会を受講して学んだこと」

幼児教育学科 堀田浩之

今年度は「アクティブ・ラーニングについて学ぶ」という内容で、玉川大学教育学部教育学科准教授・田畑忍先生を講師に迎えて行われました。今、アクティブ・ラーニング（以下 AL とします）という言葉は様々な教育の場で聞かれます。例えば、ご存じのように小学校教育や幼児教育などの初等教育の現場でも「能動的な学び」という視点でその重要性が語られていますし、実際に授業でも導入されています。今回は、高等教育の授業の中での方法としての AL ということで、新たな学びが得られると期待をしていました。

今回行われたワークは大変有意義だったと思います。この手法によって、自らの授業を振り返ることで、ある意味、「自らを丸裸」にして「他人にさらす」という気恥しく・勇気が必要な面もありましたが、理念・方針・指導方法・成果といった項目で振り返り、その繋がりを整理し、日頃相互の授業を共有していない他学科の教員の方や事務職の方々と相互共有していくことによって、学生たちの学びの方向性や授業の組み立てに関して見直しことができました。今回の研修を通じて得たものを活用し、自らの授業の質の向上、ひいては学生の学びの質の向上・より良い学びに結び付けていけたらと思います。

短い時間の中で本当に多くのことを学びました。例えば我々は「学生たちに伝わったかどうか」について「まず届かなければ意味がない」という言葉が腑に落ちました。どうすれば、より届くようになるのか、短期大学という正味2年間を切る学びの場として生き残るためには、ICT化なども当然必要になってくると思いますが、このようなきめ細かなこともより一層大切になってくるでしょう。その為の「届く工夫」を常に心がけたいと思います。

最後に、「AL は目標でなく（あくまで）手段である」という言葉が、今回の研修をまとめる言葉として、特に印象に残りました。

「FD 研修会に参加して」

看護学科 下島浩

大学教育は、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(2012 中教審答申)により、主体的な学修を促す学士課程教育への質的転換が掲げられた。その中で脚光を浴びたものの一つが今回の研修会でも取り上げられたアクティブラーニングであった。巷にはアクティブラーニングの名称を記した書籍があふれている。そんな状況の中、アクティブラーニングでグループワークをして活発な場作りはできたけど、学生から結局何が学べたのかわからなかったという声があるという話も聞く。その点について今研修で田畑先生は、アクティブラーニングは手段であり目的ではない、目的を実現する手段となっているか、それにより学生は目的を達成することができたのか、これらのことが大切と強調されていた。実際に研修会でも、まとめシートを用いて自分の授業の構成についての可視化を図り、それを他者と共有し、そこから再度自分の授業を振り返るという、アクティブラーニングの技法



を活用しながら、体験のプロセスとしてアクティブラーニングについて学び深めることができた。また、自分としても安易に新しいものに飛びつくのではなく、日頃の教授内容を基に考えを深め、必要な手段を活用していくことが大事と伝えられているように感じた。そんなことから、学生が受動的受講者から能動的学修者になるが一歩ずつでも進むような授業展開の必要性を実感することができた。新年度を迎えようとしているこの時期の研修内容として、ぜひ活用をしていこうと考えられる時間であった。

＜特集：キャリアデザインでの取り組み＞ 各学科専攻で実施されているキャリアデザインの授業についてご紹介いただくコーナーです。今回は、幼児教育学科での取り組みについて原稿をお願いしました。

幼児教育学科でのキャリアデザインの取り組み

幼児教育学科 キャリアデザイン担当 田中 住幸

1. はじめに

幼児教育学科では、1年生の前期に「キャリアデザイン」を開講しています。保育者の活躍の場は、保育所、幼稚園、認定こども園、児童養護施設や障害児（者）施設と、想像以上に幅が広い。「どの職場で、どんな保育者になりたいのか？」をイメージし、2年間の学習への動機づけを高めていくことに主眼をおいて、全15回の授業を展開しています。

2. 授業の目標

保育者には職業柄、自己受容・開示、他者理解・受容のスキルが必要になるため、「グループディスカッションに参加し、自分の意見を主張できる。また、他者の意見を聞き、自分の意見を修正できる。」といった到達目標を設定しています。更には、結婚や育児などの自身のライフイベントと復職や職場・職種の変更などのキャリアイベントのバランスを上手にとっていくことが長く専門職として勤めるポイントとなるので、「自分のキャリア（ライフ）プランが作成でき、他者の前で発表できる。」を2つめの到達目標としています。

3. 授業の内容

20年後を見通した「キャリア（ライフ）プラン」を作成し、全員の前で一人ずつ発表することを最終的な目標に、①「履歴書」の書き方、②保育者特性検査（NTI）、③保育所、幼稚園、認定こども園、児童養護施設などの施設に勤めているOGを招いての「ようこそ先輩」、④「自分史」作成と発表、⑤「18歳」「保育観」「保育関連の様々な仕事」などテーマに沿ったビデオ教材を視聴後のグループディスカッション・発表、などの演習に取り組んでいます。

4. 学生の感想より

それぞれの演習のレポートでは、現場で活躍するOGの話を聞いて『言葉遣いなどがやっぱり違うと思った。話す力がすごくあった。』『保育園や幼稚園に就職したいと思っているが、他にも調べてみたい。』などの先輩の力に驚く感想や保育に対する認識の幅が広がったとする感想が見られました。また、「自分史」の発表を聞いて『一人一人違う人生を歩いているが、最終的な目標は一緒なのだった。』といった2年間学習を共にする仲間への親近感が高まったとする感想もありました。最終的な「キャリア（ライフ）プラン」の発表では『子育て経験を活かして、知識・技術と共に信頼される保育者になりたい。』と20年後の目標を力強く語る姿も見られました。

5. まとめ

レポートを読み返してみても、将来への展望を持った建設的な感想が非常に多く、学生が将来を見据えることができる授業内容になっていると思います。今後もこの流れを大切に、更なる授業改善に取り組んでいきたいです。また、「小さい子が好きで。」「昔からの夢でした。」と、多くの学生が憧れの保育者になる夢を抱いて入学してきますが、一方で、授業を通しての専門的な学習が進み、現場での実習を重ねる度に、好きや憧れだけでは務まらない大変な仕事であることに気づいていきます。時には、「ほんとに保育者になれるのかな？」と、将来に不安を感じる学生も少なからずいます。そういった時に、「それでも、頑張って保育者になる。」と思うことができる自信と見通しをつける点も本授業の目標であるように感じています。

キャンパスライフに対する学生満足度アンケート実施結果より

教務課長 山口正之

キャンパスライフに対する学生満足度アンケート（平成 29 年度）で、学生の『能力知識の変化・教育への満足度』を調査し始めて 4 年が経った。このアンケートは、学生の知識・能力の変化、教育に関する満足度を調査し、教育内容の成果、教育活動の充実を図るためのものである。調査方法は昨年同様 4 段階の選択肢で行った。対象学生数は 496、回収数 425、回収率 85.7%（昨年度 89.1%）であった。

『入学した時点と比べあなたの能力や知識の変化について』の問いについて全体的な傾向としては、例年と同様の項目での満足度が高かった。

「専門分野や学科の知識が向上した」が当てはまる、まあまあ当てはまるが 95.7%（昨年度 98.2%）で昨年同様最も満足度が高く、次いで「他の人と協力する力が向上した」が 91.3%（昨年度 91.6%）であった。最も満足度が高かった専門分野や学科の知識が向上した項目について、昨年度より 2.5%減少している。

満足度が低い項目は、「リーダーシップの能力が向上した」が 55.2%（昨年度 61.3%）「プレゼン能力が向上した」が 61.3%（昨年度 61.9%）であった。今回、リーダーシップの能力が向上した学生が昨年度より 6%減少している。

本学での教育の中心は、資格を取得する観点からも専門分野での知識をつける教育が主であり、学生が一番実感できる内容である。他の項目については、今年度行われた FD 研修会で、アクティブ・ラーニングについてのイメージが明確になったと思う。各授業について、節目節目で振り返りを行い、学生の満足度が向上するような授業づくりを期待したい。

『教育への満足度について』では、点数が有意的に下降した項目が「専門科目の授業」「基礎教養科目の授業満足」「クラブや同好会活動」であった。

『学生生活に満足している』項目に対する学生の満足度は、今年度 76.8%（昨年度 81.8%）だった。近年、クラブや同好会へ所属しない学生が増えているように感じられる。クラブや同好会の活動など活発になるように学生会へ呼びかけ、授業以外の時間も、短期大学の生活が満足してもらえたらと思う。

今回、調査開始から 4 年目ということで、学生満足度がどのように変わってきているのかが大分見えてきた、学生が入れ替わっても満足している項目は大きくは変わらない傾向がある。今後、満足度が低い項目が少しでも満足してもらえるように学校全体で取り組みを行っていききたい。

編集後記

FD 通信 10 号をお届けします。お忙しい中、寄稿にご協力いただいた先生方に感謝申し上げます。特集では、一昨年度、昨年度に引き続きキャリアデザインでの取り組みを掲載しましたので、今回で全ての学科における取り組みが明らかになりました。各学科、個々人において参考にしていただけたらと思います。本通信が、本学の FD 活動をさらに活発にするきっかけとなれば幸いです。

（編集担当：本島幸子）

飯田女子短期大学 FD 通信 No. 10 （発行日 2018 年 3 月 31 日）

FD 委員会委員長 北林ちなみ

委員 片山直幸 神澤絢子 熊谷教 松永幸代 本島幸子 山口正之

※FD 通信へのご意見ご感想をお待ちしております。 fd@iidawjc.ac.jp